

日常生活史——E女の場合

「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける
労働者の日常生活」(その五)

宝 福 則 子

はじめに

本稿は、『人文研究』第91輯、第97輯、第98輯、第99輯に続く、「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法等については、第91輯を参照されたい。

当該資料は、1980年4月2日に、E女のブラウンシュヴァイクの自宅での3時間半にわたるインタビューをA4タイプ用紙85ページに書き起こしたものである。

ここで、参考のため、まず、E女の略歴と両親について簡単に記しておく。

1910年1月22日 ザクセンのフライベルク Freiberg で誕生。

1915年 ブラウンシュヴァイクへ越してくる。

1926年 売り子として働く。

1922年—1931/32年 ブラウンシュヴァイク・水泳協会会員。

1931/32年—1933年 労働者水泳協会「デルフィン」"Delphin" 会員。

1929年—1933年 職員労働組合中央同盟組員、演劇サークル「フライエ・ビューネ」"Freie Buhne" 会員。

1932年3月27日 機械組立工と結婚。

父：1866年8月5日にリーゼンゲビルゲ *Riesengebirge* のウラーズドルフ *Ullersdorf* で誕生、1942年ブラウンシュヴァイクで死亡。職業は板金

工, SPD (社会民主党) 党员, ドイツ金属労働者同盟員。

母: 1982年の3月26日にプロイセン *Preußen* のシュレジエン地方 *Schlesien* にあるザーガン *Sagan* で誕生, 1962年にブラウンシュヴァイクで死亡。職業は縫子, 1902年に結婚した後は時々臨時の縫子として働く。未組織。出産3回。

1. 両親について

<父>

私の両親は実の親です。父は、いつも、とても楽しい、ウラースドルフの櫓のお話を聞かせてくれました。ウラースドルフはとてもきれいだそうです。父の宗教はカトリックでしたが、宗教のことは母にまかせたので、私たちが子供が新教なのです。父は、教会から脱退しましたが、それがいつ頃のことだったのかは、わかりません。

父の職業は板金工でしたが、随分長い間、働きました。彼はとても優秀な板金工だったにちがひありません。というのも、彼は、後に、ツェラー通り *Cellerstraße* にクロム鍍金のできる板金作業場を設けたほどなのです。その時すでに、かなり年を取っていたのですが、仕事があって、ずいぶん仕事に呼ばれました。彼も年金を貰っていましたが、長く働いたものです。父はブラウンシュヴァイクへ来る前も仕事をしていました。私が知っている限り、父は失業していたことはありません。父は、ブラウンシュヴァイクでは、旧市街市場 *Altstadtmarkt* のところにあったヴンダリッヒ社 *Wunderlich* で働き、その後、長年、フランクフルター通り *Frankfurterstraße* の、ある砂糖工場で働きました。そうして、フランクフルター通りの **BB**、つまりブラウンシュヴァイク・ブリキ製品工場 *Braunschweiger Blechwarenfabrik* に板金工として移りました。私は、いつもこの工場に彼を迎えに行ったものです。その後、またヴンダリッヒ社に戻りました。

父は、36歳で母と結婚したのですが、その前に結婚していたことがあります。いつ、その一度目の結婚生活が終わったのかは、私は知りません。その

理由も知りません。私は、父が、以前、結婚していたことがあり、先妻との間にできた息子が両親を訪ねてきたことがあるということを、母から聞いただけなのです。この先妻の息子は、石切り工でした。先妻との間に他にも子供がいたのかどうかは、わかりません。「彼が何処にいるのか、どうしてまた訪ねてこなかったのか、知りたいものだ」と、いつも母が言っていたものです。父には私生児はいませんでした。いたとしたら、母が話してくれていたでしょう。父は、正式な夫婦の子供として生まれています。父の両親の写真が、私の居間の壁にかかっていますが、父は、祖父母のことをあれこれと、たくさん話してくれました。

私の両親がいつ結婚したのかは、知りませんが、新教の教会で結婚したということは、知っています。その他の、両親が婚約していたかどうかとか、いつ知り合ったのかなどについては、まったく分かりません。

私の父は、SPDの党员でした。でも、いつ入党したのかは知りません。しかし、いずれにしても、とても長い間、亡くなるまで党员でいました。父は、自分の生活に満足していましたが、男の人たちは、一人で外に出て行きたがるものです。父は、夜は、SPDの会合に出て行って、そこでビールを少し飲んで、ちょっと酔って家に帰ってくる、という生活に満足していました。

ブラウンシュヴァイクでは、金属労働者の労働組合員でした。ブラウンシュヴァイクに越して来る前のことは分かりません。他にはどこの団体にも属してはいませんでした。

父は、1942年に、76歳で脳卒中のために、ブラウンシュヴァイクで亡くなりました。以前に、軽い脳卒中の発作を起こし、あちこちから出血したことがあるのですが、回復したのです。その時、医者が母に「7日目、7週間目、7カ月目、7年目に、また発作が起こります。ちょっと、それを覚えておいてください」と言ったそうでしょう。その通りに、7年後にまた、発作が起こったのです。その前に、彼の話し方が、少しおかしくなっていました。いずれにしろ普通ではなかったので、母は、彼を注意深く見守り、世話をしていました。ある日、父は、朝、一度起きてから、またベットに戻りました。そし

て、母が肉屋へ行っている間に起き出して、帽子をかぶり——つまり、彼は、何も分からなくなっていたのです——出かけたのです。彼はリュニンゲン *Rünigen* で養鶏農家をしている、私の夫の両親のところへ行くつもりだったのです。そして、まっすぐにリュニンゲンへ向かって歩いて行くべきところを、リュニンゲンの手前で左に折れて行き、牧草地に迷い込んでしまいました。そこへ、空襲警報が鳴って、彼は驚いて、興奮しました。それで、その牧草地の上で、後ろ側へ倒れました。もちろん、私たちは彼を3週間にわたって捜し続けました。舅がシュテックハイムとリュニンゲンの大農家と付き合いがあったので、その農家の犬を6匹使って、捜索しました。舅は、ひょっとしたら父が牧草地にいるという予感があったのですが、やはり、犬がその牧草地で父を見つけたのです。帽子がそばに落ちていました。その時にはもう、野ネズミが、彼を食いちぎっていました。私は、その当時、ランガーフェルト社 *Langerfeld* で働いていましたが、母が店に迎えに来て、私たちは、一緒に病院へ行き、彼かどうかを確認しなければなりません。病院で父を見た時、頭の上の方が稲妻状の形になって真っ赤でした。つまり、そこが、突然の衝撃が起こった、つまり脳卒中の起こった部分だったのです。私の両親と義父母は、お互いにとても良い関係でしたし、私たちも実にしばしば義父母の家を訪ねました。私の娘は、本当にそこで大きくなったようなものです。舅は、この孫娘をととても可愛がりました。私の両親は、夏には、いつも郊外の義父母の家に遊びに行きました。私たちの両親同士は、お互いにとても親しくしていたのです。

〈母〉

私の母も私生児ではありません。

母が私達を連れてブラウンシュヴァイクに来たのは、父が来た1年後の1915年でした。母は、職業は縫子で、見習修業は終えていました。職業教育を受けたということは、当時としては、大変なものでした。母がよく話してくれたのですが、彼女は14人きょうだいで、末っ子でした。彼女の父親は、

鉄道に出ていたのですが、彼女が見習修業を終えた時に、ミシンを買ってくれたのです。当時は、どこの家も質素な暮らしをしていたものですが、大変な出費だったと思います。

ブラウンシュヴァイクへ来る結婚前は、母は縫子として働いていましたが、ブラウンシュヴァイクでは、もう仕事はせず、専業主婦でした。ブラウンシュヴァイクでは、家族のものを縫いました。だから、私の着る物は、すべて自分で縫ってくれましたし、時間がある時は、よその家の服も縫っていました。

母は、父との結婚前に結婚の経験はありません。母が父と結婚したのは、20歳の時でした。父は36歳でした。結婚前に子供は生んではいません。母は、教会を脱退はしませんでした。母は、流産も死産もしていません。

彼女は、いつも家にいて、家族の面倒を見ていました。2、3人の子供がいて、母親がいつも家にいるというのは、今日のように天気が悪い時や、冬など、当時の冬は今の冬とはちがいましたから、とてもゆったりとして気分の良いものでした。夜、父がSPDの集まりに出かけると、母が、昔あった話などをいろいろと語ってくれました。母が話をしてくれるか、私たちが歌うかして、家の中は、いつも楽しかったのです。昔話をすることによって、昔のことを思い出します。昔は、人々は簡素で慎ましい暮らしをしていたものです。そして、自分たちの暮らしに満足していました。その他の生活は知らなかったのです。世界を知らなかったのです。だから、外へ向かって出ていかなかったのです。旅行するということを知っていたら、していたのでしょうか、当時は休暇旅行などありませんでした。

母は党員ではありませんでしたし、労働組合員でもありませんでした。昔は、党には夫が入って、活動したのです。夫が例会などに出て行きましたが、女性は少なかったのです。

母は、1962年に82歳でブラウンシュヴァイクで老衰のために、亡くなりました。彼女は8日間寝ついた後に、とても安らかに良い死を迎えました。チトーのような長患い（宝福注：インタビュー当時、ユーゴスラヴィア大統領のチトーが、長い死の床にあった）もせず、本当に、私が彼女のために、そ

う願った通りの死でした。

2. 兄姉・祖父母について

〈姉〉

私にはゲルトルート *Gertrud* という名前の姉が一人います。彼女も、フライベルクで1904年7月28日に生まれました。姉も結婚しましたが、結婚の年は、もう覚えていません。姉は見習修業もせず、職業教育を受けなかったので、職業上の資格は持っていません。姉は、箸にも棒にもかからない問題児で、両親は、彼女には手を焼きました。彼女は、恥ずかしがりの上、ものおじもしました。私たちが歌っても、一緒には歌いませんでした。学校でもそんな風でしたし、それが変わらずに、年を取った今も、そのままなのです。彼女はもう76歳なのですが、静かで、内向的ですが、性格が良く、やさしいのです。彼女は、1920年代は、臨時雇いの労働者としてブラウンシュヴァイク市内の工場などで働いていました。その後、ここのザルツダールマー通り *Salzdahlumer Straße* の病院で、25年間も臨時雇いのヘルパーとして働きました。その後、炊事場で働き、年金が貰えるまでの年月を働き続けたわけです。だから、今は、とても良い年金を受けています。

姉は、夫のアルベルト *Albert* と離婚し、その後はずっと独身です。彼の職業については知りません。彼には、養育費を払うべき私生児の女の子がいましたが、姉が働いて、その稼ぎで養育費を払い続けました。彼は払いたがらないので、姉は、「そんなことはいけないわ、その子は養わなければならないのだから」と自分に言いきかせたわけです。その女の子も大きくなり、姉になつていました。それで養育費を払い終えたとたんに、夫が、また別のよその女に子供をませたのです。それで姉は同じ事をくり返すつもりもなく、離婚し、彼はその女と結婚しました。離婚したのは、戦争で空襲される前でしたが、いつだったかは、覚えていません。姉は、それで母と一緒に住みました。姉には私生児はいませんし、子供はいません。

〈兄〉

兄も一人いましたが、彼はすでに2年前に亡くなりました。兄の名前はアルフレッド *Alfred* で、1901年9月29日にゲルリッツ *Görlitz* で生まれ、1978年に76歳で、重い気管支喘息のために亡くなりました。彼は、何度も救急車で運ばれたものです。兄は結婚しましたが、これもいつだったかはもう覚えていません。子供は3人いましたが、私生児はいません。

兄の職業も機械組立工で、ブラウンシュヴァイクで働いていました。彼の妻は、3人の子供の育児を優先したので、専業主婦でした。

兄との関係の方が姉との関係よりも良かったということはありませんが、私たちは、一度としていがみ合ったりはしていませんし、彼の死まで、きつい言葉のやりとりもしたこともありません。私たちは、いつもお互いを訪ね合ったり、行き来していました。兄とも姉とも良く理解しあっていました。本当に、3人の間できつい言葉のやり取りはしたことがありません。

〈祖父母〉

祖父母のことについては、私が4歳の時だったと思いますが、フライベルクで母方の祖母が亡くなった時のことを、ぼんやりと記憶しています。私に物心がついた頃には、父方の祖父母は、もう亡くなっていました。父方の祖父は80歳で再婚したということです。

祖母は、70歳代で、心臓の脂肪化が原因で亡くなっていますが、とても丈夫だったそうです。

母方の祖父も80歳で再婚したので、私たちは、家でそのことを種に、ずいぶん笑ったものです。母方の祖母は、私の母が面倒をみました。彼女は、フライベルクのハルスブリュックナー通り *Halsbrückner Straße* の自分の家で、71か72、3歳か、70歳代の半ばで亡くなったのです。

どちらの祖父母もブラウンシュヴァイクには住んでいませんでした。父方の祖父母がどこに住んでいたのかは知りませんが、父は、その両親の許で子供時代を過ごしたウラースドルフはとてもきれいだったと話していましたか

ら、多分、ウラースドルフに住んでいたのでしょう。大きな雪の積もった山や樞のことを話してくれたものです。祖父母を写真でみるかぎり、ずいぶんと洗練された人たちに見えますが、彼らの職業は知りません。祖父母たちと同じ家で住んだこともありませんでした。

3. 住居について

私が1915年にブラウンシュヴァイクに引越してきた時に住んだのは、ユーリウス通り *Juliusstraße* の、大きいけれど、たったひと間の住居でした。多分、ユーリウス通り2番だったと思います。

父は、その1年前に、すでに一人で先に越してきていました。そこへ母と私たち子供が、越してきたわけです。その1年後に、ヴェスト通り *Weststraße* の集合住宅の中の小さな住居に移りました。たしか、ヴェスト通り23番だったでしょう。その家の土地はピュルム家 *Piilm* のものでした。私は、この家から、1916年に、国民小学校に入学したのです。このヴェスト通りには、1916年から17年まで住み、再び、ヘドヴィツヒ通り *Hedwigstraße* 6番のさらに良い住居に移り、ここに、私自身は1932年まででしたが、私の両親は、44年8月15日に空襲で焼け出されるまで、住んでいました。

ユーリウス通りの部屋は、デットマー嬢 *Fritulein Dettmer* の借りている住居の中の大きくて素敵な1室を又借りしていたものです。彼女の住居は大きかったのですが、私の父は板金工でしたから、家の修理など、いろいろ手伝ってあげていました。彼女は、感じの良い人でしたが、もう生きてはいないでしょう。この1部屋に私の家族5人、つまり両親と子供3人が暮らしていたのです。私たち家族専用の台所はなくて、デットマー嬢の台所を一緒に使わせてもらっていました。他の親戚などは一緒に暮らしてはいませんでした。狭かったけれど、私たちは幸せでしたし、とても素敵な住まいだったと記憶しています。

ヴェスト通りの住居は、小さな家の中であって、屋根裏に私たち子供用のとても素敵な部屋がありました。下には両親の寝室と台所と居間がありまし

た。だから、全部で3部屋の住居でした。トイレは、外ではなく、階段室にありました。浴室はありませんでしたが、地下室がありました。私たちの住居専用の廊下もありました。家の玄関を入ると、まず数段の階段がありました。階段を上ると廊下で、そこから各部屋に分かれました。この廊下から階段を上ると、屋根裏で、そこに屋根裏部屋があって、この部屋の前にとても立派なクルミの木がありました。それは素晴らしかったものです。昔、子供の私が物語の本を読むのは、いつもこの部屋でした。私はこのクルミの木が好きで、離れがたかったのです。本当に素晴らしかったのです。屋根裏には、物干し場もありました。この住居は、とても良く、みんな揃っていたのです。ここにまた5人で住んだのです。住居内に物置部屋があったかどうかは、思い出せません。

ヘドヴィツヒ通りの住居には、寝室が2室、大きな居間、台所、とても長い廊下があって、この廊下に沿って、もう2部屋ありました。だから全部で6室ありました。私の姉が結婚して、そこに一緒に住みました。台所は、大きな居間兼用の台所でした。廊下に沿って、物置部屋もありました。トイレは、階段室でしたが、階段を下りなくともよくて、同じフロア上の廊下を出て右側にありました。でも浴室は、当時はまだありませんでした。ここでも私たちは、5人で住んでいました。私は、末っ子でしたが、弟妹は、もう生まれませんでした。

4. 旧市街の様相

ヴェスト通りには、中流階層の人々、つまり労働者の中流階層 *Arbeiter-mittelstand* の人々が住んでいました。そうですとも、百パーセントです。ウィルヘルミトア *Wilhelmitor* の一帯は、品の良い労働者街でした。健康的な労働者街でした。品の悪い労働者街も、ブラウンシュヴァイクにはありました。具体的に挙げると、クリント *Klint*、ニッケルンクルク *Nickelnkulk*、ヴェルダール *Werder*、カイザー通り *Kaiserstraße*、ヴェーバー通り *Weberstraße* などは、品の悪い労働者街でした。こういった場所は、ひどかったものです。そ

ここでは、女たちが、子供を抱えて、自分の隣にも数人の子供を座らせながら、道端からすぐに家へ入る階段の上に乗っていました。そこいら辺には、ゴキブリや南京虫のような気持ちの悪い虫が、うようよしていました。

クリントやリッター通り *Ritterstraße* は、低い階層の労働者が住む街でした。ヴェスト通りは、こちら辺とは百パーセント違っていました。本当に。フィルショフ通り *Virchowstraße* 辺りまでの、ヤーン通り *Jahnstraße*、ヴェスト通り、フランクフルター通り、クラマー通り *Kramerstraße*、ベルクフェルト通り *Bergfeldstraße* の辺りをウィルヘルミトアと呼んでいたのです。こちら辺の住人は、本当に労働者の中流階層の人々でした。町の反対側のヌスベルク通り *Nußbergstraße*、マリーエン通り *Marienstraße*、カール通り *Karlstraße* など、こちら辺と似たような階層、つまり労働者の中流階層に属する人々が、住民でした。カイザー・ウィルヘルム通り *Kaiser-Wilhelm Straße* は、医者や教授など、もう一段階上の層の住民でした。

5. 学校生活

1916年に、私はここ、ゾフィーエン通り *Sophientraße* にあったゾフィーエン学校 *Sophienschule* に入学しました。この学校は、国民小学校でした。当時は国民小学校で、その後には中等学校 *Mittelschulen* ができたのです。そして、その後にはリゼウム *Lizeum* ができたのです。最初の4年間を終えて、ズイドーニエン通り *Sidonienstraße* の中等学校に行きました。この学校には、16歳まで通いました。1926年までです。だから、通算で10年間、学校に通ったことになるわけです。

私は、1916年に国民小学校に入学し、1920年に上の学校に進級し、1924年に堅信礼を受け、1926年に卒業したのです。国民小学校時代の最初の4年間は、私は悪ガキでした。とてもきかん坊でした。言うことを聞かない生徒の手のひらや、手の甲を、物差しで叩く教師がいましたが、私は、いつも、顔を後ろに向けて、後ろの子と話していたので、しばしば、その方法で叩かれました。

後ろを向いていると、「さあ、フィッシャー母さん、君の脚をベンチの下に入れて、後ろを向きたまえ」—— 当時は、まだ長いベンチでしたから —— 「そうしたら、みんなの顔を見ることができるだろう」と言ったのです。そうすると、私は、本当に彼に背中を向けて、後ろに向き直りました。本当にきかん坊だったものです。それは、入学して3年目のことでした。

ジードーニエン通りの中等学校は、女子校で、当時は、まだ男女共学ではありませんでした。中等学校では、もう叩かれたりすることはありませんでした。男の子の学校では、しばしば殴られたようですが、女の子は、そんなに殴られなかったのです。

6. 子供時代の労働と遊び

私は、とても素晴らしい子供時代を過ごしました。私たちの生活は、質素でしたが、子供の私が働く必要はありませんでした。いつも、叱られましたけれども、家事も手伝いませんでした。嫌いだったのです。だから、いつも姉がすべての手伝いをしなければならなかったのです。彼女は洗濯も母と一緒にしなければなりません。昔は、洗濯場に行ったものですが、彼女は、せせと洗濯しなければならなかったのです。私は、せいぜい自分のハンカチを洗うだけでした。

でも、母が主に家事仕事をしました。母は、いつも「お待ちよ、お前が大きくなったら、愕然とするんだから。いつも何もしたくない。いつも自分の顔だけ洗って、上品ぶっているけれど、それで世の中は通らないんだよ」と言ったものです。

私たちは、道路や中庭で遊びました。ヘドヴィッヒ通りで住んだ家には、この家の住人の共同の、とても大きく素敵な中庭がありました。この中庭では、人形遊びをしたものです。とても楽しかったのですよ。今、私の住んでいる家には、子供たちが遊ぶ中庭がありません。通りから通路を通って中庭に出ます。そして中庭から家の中へ入っていくのです。家の入り口の前には、大きな桶の中に植えられた、素晴らしい木が2本、立っていました。私たち

の人形の乳母車が階下に置いてあり、人形用の服も作ってもらい、本当に素晴らしかったのです。人形遊びの仲間は、ここに住む小さな女の子たちでした。私たちの年格好は、大体同じでしたから、この子たちと一緒に学校に行き、冬には、雪合戦をしたものです。私たちは、今の子供たちに比べると、ずっと楽しい子供時代を過ごしました。兄や姉とも遊びましたが、近所の子供たちに比べると、遊ぶ機会はずっと少なかったのです。女の友達と遊ぶ方が、ずっと多かったのです。

両親の住居の中でも、いろいろな遊びをしました。当時、「製粉所と婦人」‘*Mühle und Dame*’という遊びはもうありましたし、「おお、怒るなよ」‘*Mensch ärgere dich nicht*’もありました。家の中では、遊びをしたり、歌ったり、手芸もしました。私は12歳の時に、手芸学校に行きました。ここブラウンシュヴァイクのラッフェルト通り *Laffertstraße* に手芸の先生がいて、手芸を教えてくださいました。両親は授業料を払わなければなりませんでしたが、とても楽しかったのです。たくさんの手芸作品を作りました。そして、私が14歳になった時、まだ見習修業を始める前で、13歳だったかもしれませんが、女性の裁縫師の親方のところに行きました。

そこで、3カ月ほど裁縫を習い、自分の着る物を縫ったのです。布地、糸などを持っていかなければならなかったのですが、当時、これは高くつきましたが、両親が費用を払ってくれました。当時は、若い女性や少女は、今のようなメリヤス編みのシャツではなくて、布地のシャツを着ていました。これには、上品な填め込み飾りのパネルやレース飾りなどが、縫い付けられました。私は、これを習ったのです。

7. 職業

私は、心を込めて、売り子の見習修業をしました。そして、つい5年前まで仕事に就いていたのですよ。当時、見習の修業期間は、3年間でしたから、1929年までの3年間、見習修業をしたわけです。見習修業は、シュトゥルンプ通り *Strumpf Straße* の紳士用品専門店の「シュトゥルンプ・シュトラウ

ス」*Strumpf Strauß*」でしました。この店は、今はもうありません。見習い修業の後、1年間、他所の店に行っていたのですが、店主がまた私に来るようと言うので、この店に戻りました。

その1年の間、私は学校通り *Schulstraße* のユダヤ人のフランク *Frank* の店で働きました。やはり売り子としてです。フランクは、大きな店で、カールシュタット(デパート) *Karstadt* の向かいの、ちょうど今のヘルティエ(デパート) *Hertie* が建っている場所にあって、カーテンなどを扱っていました。この一角の土地は、すべてフランクのものでした。でも、彼はユダヤ人だったので、土地を接収されて、アメリカへ行ってしまったのです。多分、1929年から30年にかけてだったと思いますが、いずれにしろ、1年間、フランクの店で働いたわけです。そして「シュトゥルンプ・シュトラウス」のティエチエ氏 *Tietje* が呼び戻してくれたというわけです。

1930年からまた「シュトゥルンプ・シュトラウス」で働き始めましたが、それほど長くは続きませんでした。娘が生まれ、1932年に結婚したので、仕事をやめたのです。その後、結婚中に定職に就いた事はありませんが、娘が4歳の時に、臨時雇いで働きに出ました。でも、ほんの時たまでした。その後、1936年に、最初は、ほんの手伝い程度の仕事口でしたが、ランガーフェルト社へ行きました。この後は、ずっと働き続けて、5年前の1975年にやめるまで、ずっと仕事を続けたのです。結婚中もいつも一生懸命に仕事をしていたのです。この間に失業したことはありませんでした。

夫のエーヴァルト *Ewald* は、結婚当時は機械組立工 *Schlosser* で、その後、技師 *Techniker* になりました。夫は、戦争中、ルター工場 *Lutherwerk* で、職員と労働者の職場代表者 *Betriebsobmann* に選ばれたことがありました。彼はその後、社会相談員 *Sozialbetreuung* も引き受けました。当時、食券や購買券がありましたが、同僚達が安心して仕事ができるように、いつも彼は、それを同僚たちの代わりに券を取りに行き、彼らの用事を片づけていたのです。それで、同僚達は、朝の5時から並ばなくてすんだのです。私は、朝の5時に並ばなくてはならなかったのですけれど、夫が、私のそばを通過して、

同僚のために券を取ってくるのです。私は家族のために、並ばなくてはならなかったのですよ。立っているのがつらいので、私たちは踏み台を持っていったものです。そんな風に、私の夫はとてもきちんとした人でした。とてもきちんとして、真面目だったのです。ルター工場では、肉の購買券を管理して、それを配ったりする仕事などもしたものです。つまり、彼は、そこでは秀逸な社会相談員になったのです。そのころ、彼はもう機械組立工ではなくて、技師でした。そこで、食券が1枚なくなったら、もう大変でしたから、彼は実に公正に管理したのです。

1930年代の状況を振り返ってみると、私は当時、中流の階層に属していたと思います。何故かという、私は労働者の階層の出身ですが、自分に教養を身につけたかったのです。私は、私の両親の築いた境遇よりも良くなりたかったのです。私の両親も、子供たちが自分たちの境遇よりも良くなるように、努力してくれました。だから、私は、職業に就いて、お金を稼ぎ、順調に人生を過ごせるようにと思いました。それで、私は、労働者中流階層 *Arbeitermittelstand* に属していると思っています。

労働者でも、順調に人生を過ごすための努力をします。労働者の中でも、下に落ちていくのを止められない者と、何かを学び、考えることが出来、自分の意見を主張し、ある程度は経済的に順調で、社会的に比較的高い状況にいると感じられる者がいます。ある程度ということであって、どの程度良いのかは、知る必要はありません。そのような労働者の属するのが、私の言う中流階層ということなのです。

8. 親子関係

私は、父から殴られたことはありませんでした。でも、たった一度だけ、殴られました。私はままごと遊びのコーヒーセットを持っていたのですが、ある時、屋根裏の物干し場で、椅子を窓際に持ってきて、そのコーヒーポットに入れた水を窓から下の屋根に注いだのです。その水が、きたない雨樋を通して汚れて、中庭に干してあった、洗ったばかりの洗濯物をみんな汚して

しまったのです。それで、その晩、父に手ひどくお尻をぶたれてしまい、その後、お尻が痛くて、坐ることができませんでした。数日間は、学校にも行けませんでした。お尻に青あざができましたが、それもたった一度だけのことです。他には、叱られるだけでした。私たちが食卓に就くと、父は私たちをただ見るだけで良かったのです。そうすると、秩序正しく、みんなが行儀を良くしました。

母は、外見上は穏やかでした。でも、私に子供が出来た時は、殴りこそしませんでしたでしたが、恥知らずと罵りました。殴ったりしたら、私の夫は、私を両親の家から連れだして、自分の両親の家へ連れていったことでしょう。でも、腹を立てたら、つい手が出るものです。私も、3週間に一度くらいは、娘の横っ面を張り飛ばしていたものです。それにもかかわらず、私の母は、私をぶったりしたことはありません。父もです。当時、姑が、「エーヴァルトは、殴られること無しに大きくなったのよ」と話してくれたことがあります。

私は、子供の時に、両親と個人的な問題について話したことはありません。

私に子供が生まれた時、父は何も言いませんでした。母は、「あー、この恥知らず、この恥知らず」と言いましたが、昔の人々は、そんなものでした。

私の夫が父と話し合いましたが、母は、とても苦しみました。「よりもよって、末っ子が子供を！」と、まるで私がどん底の貧民窟で子供を産み落としたかのような嘆きようでした。そうしたら、父が、当時は婚約者だった、私の夫に「このままで良いわけがない。私はエミー *Emmy* を貧民窟で拾ってきたわけじゃあない。私は彼女を結婚させるよ。それがいちばん問題のない解決法だろう」と言ったのです。

母は、「この恥知らず、この末っ子が。なんで一体、そんなことができたんだろう」などと言って、それはもう、大変でした。母は、ただただ嘆いたり、私を叱りつけたりしましたが、私を家から追い出したりはしませんでした。私は、両親の家で私の小さな娘を育て、夫は毎日、やって来ました。つまり、私たちは離れることはできなかったのです。大恋愛だったのですよ、そしてその後もずっとそれが続いたというわけです。

当時は、未婚で子供を生んだら、変な目で見られました。「見てごらん、あの娘を！ 男をつくって、そいつがあんな娘をこんな不幸な状況に追い込んでしまったんだよ。まったく、なんてこった！ 子供を生んで、まだ結婚していないなんて」などと陰口をきかれたり、それは大変でした。それは、比較的高い水準の家庭だけでなく、労働者の家庭でもそうでした。ひょっとしたら、私の家は、少しばかり、労働者の家庭よりも上だったのかもしれない。

階級という意味から言うと、私が育った、私の両親の家は、労働者でも最低のクラスではなかったのです。私は娘をヘドヴィツヒ通りの私の両親の家で産みました。ヘドヴィツヒ通りは、デーリンク通り *Döringstraße* とゾフィーエン通り *Sophienstraße* を結ぶ通りです。フェルディナント橋 *Ferdinandbrücke* から来て、デーリンク通りとゾフィーエン通りを突っ切るのが、ヘドヴィツヒ通りです。当時、未婚で子供を生むことを隠すために、州立病院に逃避する人が多かったらしいですが、私の両親はそれを許さなかったもので、私は家を出ませんでした。

両親の家では、私たちの前で、お金のことについては、話されることはありませんでした。話す必要がある時は、両親は外に出ていきました。親がいくら稼いでいるか、ということを知っているなんてことは、昔はありませんでした。当時は、週給でした。金曜日に父が家に帰ってくると、子供達はお菓子の入った大きな袋をもらったものです。母は、特別にチョコレートを1枚もらいました。でも、子供のいる前では、お金のことは、まったく話されたことはありませんでした。両親は、子供たちが、両親の話していることを、よその人に話すだろうと思ったのです。

9. 結婚

私の夫のエーヴァルトは、1906年にブラウンシュヴァイクで生まれました。彼は、根っからのブラウンシュヴァイク人でした。彼の誕生の月日はもう覚えていません。夫の職業は、結婚当時は機械組立工で、その後、技師になりましたが、これも何時、技師になったのかは思い出せません。でも、私

たちが結婚して数年たった時に技師になったのです。彼は、残念ながら46歳で亡くなりましたが、私は再婚はしませんでした。夫の父親は、旋盤工で、母親は専業主婦でした。

私たちの場合は、若き日の恋でした。私の夫は、私にとって最初の男性で、他の男性は知りません。私たちには、結婚前に、1930年からの2年間、婚約期間がありました。婚約しようと言ったのは、夫でした。結婚しようと言ったのも夫でした。はっきりしたものでした。

私には娘が一人います。インゲボルク *Ingeborg* という名前で、1930年9月4日にブラウンシュヴァイクで生まれました。今、彼女はデュッセルドルフ *Düsseldorf* に住んでいます。私たちは、手早いですから、彼女は結婚の1年半前に生まれたのです。娘が生まれたとき、私はぜんぜん結婚しなくなかったのです。何を考えているのか、おかしく思うでしょうけれど、嫌だったのです。そうしたら、夫が「結婚しよう」と言って、さっさと書類を用意したのです。でも、彼はそれを失くしてしまいました。

子供を産むまで、私は結婚しなくなかったのです。結婚しなかっただけで、もう結婚しなくなかったのです。なぜかという、私たちの間には、小さかったけれど、意見の相違がありました。もう、とても近しくなり、関係もできているのに、そんな風に喧嘩をするということが、私にとっては、ショックだったのです。だから、もう彼とは一緒にいたくなかったし、彼を見たくもなかったのです。そうするうちに彼が書類を整えてしまったのです。

子供が産まれる前は、私たちのうち、どちらも結婚しなくなかったのです。彼に捨てられるという不安などを感じたり、考えたりしたこともありませんでした。私はスポーツに力を入れていましたし、考え方は、とてもさっぱりしたものでしたから。本当に。そして、それが私の夫に感銘を与え、気に入られもしたのです。おもしろいことに、私は一度として、彼が私を捨てるなどと、考えた事はありません。

結婚した当初は、質素に、ヴェスト通り *Weststraße* 54番、今のフーゴ・ルター通り *Hugo-Lutherstraße* の夫の両親のところに一緒に住みました。つま

しく簡素に暮らしました。私たちは、何にでも耐えることができました。その後、夫の両親がこの住居を出ました。彼らは、リュニンゲンとライフェルテン *Leiferten* の間に小さな家を建てたのです。彼らは、そこに、いわば雛鳥の飼育場というか、つまり養鶏場をもっていたのです。それで彼らは、ヴェスト通りの住居を出て、私たちがその住居を買い受けたのです。

私と夫は、SPD のダンスパーティで 1925 年に知り合いました。クリスマス休暇の最初の日でした。夫は、とても良く気がつくひとだったので、生きていた間は、毎年、クリスマスに、私にバラの花をプレゼントしてくれました。彼は、結婚記念日もけっして忘れませんでした。本当に、彼は変わっていませんでした。あまりに良い人すぎたのです。残念なことに、彼は死んでしまいました。あまりに早すぎました。46 歳でした。彼は、とても生きることを楽しむ人でした。彼は、朝、歌いながら起きて、夜は歌いながらベットに入りました。つまり、私達の家では、歌ばかりでした。とても素晴らしかったのです。当時、私たちは、ブラウプンクト社 *Blaupunkt* のラジオを持っていました。フォルクスエムプフェンガー社 *Volksempfänger* のではありません。コーレンマルクト *Kohlenmarkt* のラジオ屋のパウリク *Pawlik* で、当時のお金で 300 マルクで買いましたが、大変な額でした。

夫とちょっとした喧嘩をしても、私は決して両親の許に行って、愚痴ったりはせずに、私の胸にしまっておきました。それに、私は結婚している間、女友達は作りませんでした。私の家族が友達だから、と自分に言い聞かせていたのです。私の居場所は家族の中なのだと思って、女同士がおしゃべりするお茶の会などには行かなかったのです。夫が家に帰ってくる時刻には、私はいつも家にいました。私は、休日に子供と泳ぎに行ったり、水浴びに行ったりすることなど何でも、前もって計画を立てて動いていました。娘のインゲがまだ小さかった頃、夫の仕事が終わるのを待って、工場に迎えに行きました。彼は、長い間、クレメンス&フォーゲル社 *Clemens & Vogel* にいましたが、最初は機械組立工として働いていました。それは、素敵すぎました。私にとって、家族は何よりも優先されるべきものでした。

10. 性・避妊

私は、誰にもきちんと性教育を受けたことはなく、夫と二人で一緒に、つまり経験から知りました。夫の前には何も経験はしていません。女友達と性について話をしたこともありませんでした。たわいなかったのです。だから、どんな風にするのかも知りませんでした。今の若者達は、とても好奇心が強く、すべて試してみます。そんなことをして何になるのでしょうか。私が初めて夫とキスをしたのは、18歳の時でした。初めて性交渉をもったのは、19歳の時でした。子供が生まれたのは、21歳になる3カ月前でした。

でも彼と知り合ったのは、15歳でした。私はスポーツマンでしたし、無邪気でしたから、その当時は、私は彼が私に触れようとしても、それを許さなかったことでしょう。18歳で夫との付き合いが深くなった時も、人間の体のことを何も知りませんでした。でも、もうほとんど19歳になっていましたから、理解するのに、そんなに時間はかかりませんでした。だから、まもなく成功しました。でも、性交渉の何がよいのか、わかりませんでした。私は、正直言って、性交渉を、ひどいもんだと思いました。私はあまりにも無邪気すぎたのです。あまりにうぶで、おばかさんでした。今の若い娘さんたちは、なんでも試したがりますが、彼女たちは、性交渉を素晴らしいと思うから、何度もくり返してみるのでしょうか。いずれにしろ、私は性交渉を素晴らしいとは思いませんでした。

当時、避妊具の知識などありませんでした。結婚後も知らなかったし、使いませんでした。その後、男性用の避妊具がいくつか出ましたけれど、私が知らないだけなのかもしれませんが、女性用の避妊具はありませんでした。そういえば、女性用の注射状の洗浄用具がありました。でも、これの効果はあやしいものです。

結婚中も、避妊具はまったく使いませんでした。子供は一人だけです。

私の両親の時代には、男性用の物は、何かあったらいいですけど、避妊具を使わなかったと思います。父が避妊具を使ったかどうかは、私は知りま

せん。両親は、私をそのような話題から遠ざけていましたから。当時は、今の若い母親のように、5歳の長女に体のすべての名前や仕組みを教えるなどということは、なかったのです。私の両親の家でも、そんなことはありませんでした。今のように、夫婦と一緒に風呂に入るなどということもありませんでした。父親は小さな娘と一緒にお風呂に入りました。そうすれば、娘は父親に、なぜお父さんにはついでなのに、私にはないなどと聞きます。そうすると、父親は、娘に、これは何々というもので、どうなっているなどと説明しますから、子供はその後、もうそれについて考えなくなります。そんな風に説明をうけることは、小さな娘にとっては良いことです。昔は、小さな女の子たちは何も知らずにいたので、無邪気にどこかの大人に付いていったりして、性病を移されることが多かったのです。

女の子の月経が始まったら、「お前は、成熟して、赤ちゃんを産むことができる年に達したのだよ。だから、気を付けなさい。そして結婚する男性のためにとっておきなさい。それがお前の最高の贈り物なのだから。もう他の男と性交渉を経験している女性と結婚することに、どの男性も平気でいられるわけではないのだよ」と教えるべきなのです。でも、私の両親は恥ずかしくて、何も教えてくれませんでした。月経が始まった時、母は、「こんなことが4週間毎に起こるので、こんな風にして手当をするのだよ」と教えてくれただけでした。当時は、生理用品としては、まだタンポンはありませんでした。

洗濯をして繰り返し使用する、婦人用月経帯しかありませんでした。これは、煮沸しなければなりません。当時、私たちの住んでいたヘドヴィツヒ通りの家の女性の住人たちは、社会的にも上の階層の人々でしたが、誰が月経帯を洗ったり、干していたり、煮沸しているかということ、良く注意して、見ていました。

月経帯が、きれいに洗濯して、煮沸し、大きな洗濯物と一緒に中庭のロープに干されていないと、「何かおかしい、彼女はきっと……」ということになりました。つまり、「彼女は子供ができたんだ」ということです。とてもプ

リミティヴでした。でも彼女たちは、中等学校を出た人たちでした。今の世の中では、タンポンなどの生理用品は、どこでも見えるところで売っているし、広告もされています。だれでも、それが何のための商品なのかを知っています。タンポンは、とても素晴らしいと思います。私は、少女の頃、水泳の競技大会に出場していました。生理中でも、水の中に入って、競泳しても何ともありませんでした。当時は、生理が不規則でも、性交渉があったわけではないので、妊娠の心配をしたことはありませんでした。でも、3回か4回、水の中に入ったところで、突然、生理の血液が、にじみ出てきて、往生したことがあります。

私は、生理が止まった時、不思議なことに、不安にはなりません。その時、夫に、当時は彼氏でしたが、「何てことでしょう。生まれてくるわ」と言いました。墮胎しようとは考えもしませんでしたし、今のように、それが可能であったとしても、墮胎はしなかったでしょう。もし、墮胎を考えたとしたら、手術に恐怖を感じたことでしょう。

墮胎をした人の話は聞きました。リュニンゲンのある若い婦人が、もう子供が一人いるので、二人目は欲しくないからといって、編み針を使って、子宮をメチャメチャに突き刺したのです。それで、膿が出てきて、彼女がドクター・ノルテの所に担がれてきた時は、先生は手の施しようがなく、彼女を病院に送り込みましたが、手遅れで亡くなってしまいました。彼女の夫は、再婚しました。息子一人しかいなかったのですが、彼は、再婚した相手との間に5人も子供を作ったのです。彼らは、今もリュニンゲンで暮らしています。その若い女の人は、2人目の子供を欲しくないからと、お腹の中の一人の子供のために、命を失ってしまったのです。まったくばかげた事をしたものです。

彼女は、私の友達ではありませんでしたが、私は村の中を自転車で通っていたので、顔見知りでしたし、村の人たちの名前もみな知っていました。もちろん、彼女の死は、ブラウンシュヴァイクのセンセーショナルな出来事でした。これは、1937年から39年の間くらいに起こった出来事です。この事件

については、公然と話されました。当時、闇で墮胎をすると、懲役2年の罪になるということを聞いたことがあります。

墮胎した人は、刑に服すべきだなどと思ったことはありませんが、そんなもぐりの医者に行かずに、きちんとした医者のところに行けばよいのに、と他の人と話したことがあります。墮胎の処置をしたのは、大体がもぐりの女性の医者でしたが、しくじって、不幸にされるかもしれないというのに、そういう人のところに行ったのですよ。

11. 宗教・政党・労働組合

〈宗教〉

私は、新教の教会で洗礼を受けています。まだ中等学校に通っていた頃の、24年に堅信礼を受けました。姉も兄も堅信礼は受けています。両親の家では、まだそれが当然のことだったのです。

でも、結婚した年の1933年に教会から脱退しました。私の夫は、当時、すでに教会から脱退していました。何か特別の理由によって教会を脱退したというわけではなくて、夫が、牧師にもうお金を渡したくなかったというだけのことでした。若くして結婚すると、愛し合っていますから、夫がすることを妻もするのですよ。私の夫は左翼主義的な考えの持ち主でしたから、教会にお金を出すことに賛成ではなかったのです。

だから、脱退は、まったく私自身が決めたことではありませんでした。私は本当のところ、そうすることが、少し悲しかったのです。というのも、私たちには、娘が生まれましたが、夫は娘に洗礼を受けさせることを望みませんでした。それで、後に、娘は、1942年に、ヴァーテンシュテット *Watenstedt* 近郊のインゲルエーベン *Ingeleben* に疎開していた12歳の時に、そこでまず洗礼を受けました。もうブラウンシュヴァイクは、絶え間なく空襲を受けたので、学校の生徒全員が、疎開したのです。娘は、インゲルエーベンに、彼女の小さな友達と一緒に疎開しました。彼女のクラスの生徒たちも一緒でした。そこで彼女たちの面倒をみてくれた御夫婦が、この二人の子供たちが、

まだ洗礼を受けていないので、洗礼を受けるべきだと主張したのです。その後、さらにまた1944年にインゲルエーベンで堅信礼を受けたのです。

ちなみに、私の舅は、青年式を受けているのですが、その当時、ブラウンシュヴァイクで青年式を受けたのは、彼を入れて、たった二人だけだったそうです。

〈政党〉

父が、SPD でしたから、両親の家では政治のことについて、父が母によく話していました。子供たちもそばにいて、その話を聞いていました。父は、最初は、今の『ブラウンシュヴァイク新聞』‘*Braunschweiger Zeitung*’を購読していましたが、当時は、今ほどに右寄りではなかったと言えます。当時は、『アルゲマイネ・アンツァイゲ』‘*Allgemeine Anzeige*’という名前でした。その後、『フォルクスフロイント』‘*Volksfreund*’が創刊されて、これを購読しました。私は、結婚後、夫の許では、『フォルクスフロイント』しか購読していません。夫は、いつも「何を読むかは夫が決めるもので、夫たちがそれをできずに、『フォルクスフロイント』を読まないなんてことになれば、それは悲しいことだ。何を読むかを決めるのは男で、妻は夫に従わなければならない」と机を叩きながら、言ったものです。

私は、SPD には、夫がナチに手ひどく殴られた後、つまり戦後に入党しました。夫は、ライクスバンナー *Reichsbanner* (宝福注：ナチにたいする抵抗組織で、SPD が中心となって組織された) で活動しました。ライクスバンナーのマルチンスヘルナー *Martinshörner* に属していたのです。33年の禁止まで活動していました。そのために、誰かが彼を密告したので、引っ張って行かれたのです。

〈労働組合〉

私は、見習修業後の1929年頃に労働組合に加入しました。労働組合の名前は忘れてしまいました。最後に加入していたのは、ここのヴァイゼンハウス

ダム *Waisenhausdamm* にあるドイツ職員労働組合 *Deutsche Angestellten Gewerkschaft* だったと思います。最初の頃に加入していた労働組合の名前は覚えていません。

労働組合に加入した理由は、私たちが左翼だったからです。もう少し多くお金が欲しくても、一人では何も達成することができません。だから、労働組合に入ったのです。それに私の夫が、そういうことについて啓蒙してくれて、労働組合に加入することは、とても良いことだと思ったのです。

労働組合に加入する前の、15歳になったばかりの時に、私は夫と知り合いました。私たちはSPDのダンスパーティの時に知り合ったのです。私は両親とそのダンスパーティに行っていたのです。最初は、私はそのダンスパーティにぜんぜん行きたくなかったのです。若い娘にとって、そのようなダンスパーティなど、素敵なことには思えないですからね。それで、私の父が、「まだ、ぐずぐず言って、一緒に来ないなら、お前は今晚、お仕置きだからな。一緒に来い。お前を家に一人で残してはいかないぞ」と言ったのです。あれは、クリスマスの2日目の祝日だったと思います。あるいは最初の祝日だったかもしれませんが、その日にSPDがダンスパーティを催したのです。そのころは、私たちは、もうヘドヴィツヒ通りに住んでいました。

私は、この晩のダンスパーティで、はじめて夫と知り合ったのです。だから、労働組合に加入したのは、私の夫の影響、つまり当時の友人の影響と言えるでしょう。

私の夫は、1953年に亡くなりました。腎臓の手術をして亡くなりましたが、彼は、1933年にナチ党員に手ひどく殴られて、その後遺症が死亡の遠因でした。腎臓全体がめっちゃくちゃになるほど殴られたのです。彼は、(牛の尿道を干したものに鋼鉄線を中心に入れて作った)鞭で60回も殴られたのです。政党などからんだ理由によってではなく、彼は単なる密告によって、11人のナチ親衛隊員に引っ張って行かれたのです。彼は、その前にはSPDには属していませんでした。まったく属してなどいなかったのです。その後、つまり戦後になってから彼は入党したのです。

その事件が起こったのは、彼らが、ここブラウンシュヴァイクで略奪をした最初の夜の、1933年のことでした。彼らがここのシュロス通り *Schloßstraße* にあった、「フォルクスフロイント」の社屋を占拠した後の最初の夜でした。フーゴ・ルター通りの家から夫を連行していったのです。私たちが結婚して1年後でした。ちょうど私たちの結婚記念日に引っ張っていかれたのです。なんと素晴らしい結婚記念日だったことでしょう。まったく素敵な思い出ですとも、殴打の一つ一つを一緒に数えたりして。テーブルの上に横たえられて、そこに大きな男が、鞭を持って現れるのです。偶然、私はその男を見知っていました。彼はもう生きてはいませんが、ここの学校通り *Schulstraße* のヴィッティング *Witting* のボーイでした。とても大きな男でした。彼らはとても凶暴でしたし、サディスティックでした。あのブラザーたちは。

ナチたちが、引っ張ってきた男の人たちにその部屋で判決を下すと、彼らは恐怖から窓を蹴破って逃げました。そうして、ガラス屋根を突き破って、その下の新聞社に落ちてきたものです。ナチどもは、野獣のようにここで乱暴を働いたのです。私は一晩中、夫を捜し回りました。私は、夫が何処に連れて行かれたのか、わからなかったからです。彼は、素足で靴をはいて、まだ寝間着（：紳士用のネグリジェのような寝間着）のまま、連れて行かれたのです。昔は、どちらかという、男の人はパジャマよりは寝間着を着ていたものですが、彼は服を着る余裕も与えられず、もう階段の途中から鞭で体を殴られていました。夫が、翌朝8時に帰宅した時には、体中が、青あざだらけでした。彼は、父親と一緒に一晩、留められたのです。でも、舅には、手を出さなかったということです。というのも、舅は、小さな傷ですけれども、戦争で指に傷を負っていたからなのです。舅には手を出さなかった代わりに、その息子に手を出したというわけです。私の夫は、その前からすでに労働組合員でした。彼は、ナチどもにとっては、左すぎたのです。

12. 祝い事・余暇

〈祝い事〉

私の両親の家では、祝い事のために、お金は使われませんでした。誕生日には、ただケーキが焼かれ、コーヒーを一杯飲んだだけで、大きなパーティやプレゼントはありませんでした。小人数の人たちと一緒にケーキを囲んだだけです。クリスマスも、いつだって、とても質素でした。

私は、子供用のおもちゃのピアノと本をもらいました。それだけでしたが、私たちは幸せでした。母は、クリスマス前にクッキーを焼いたりしました。3人の子供がほしがりますからね。

SPDのクリスマス・パーティがあり、これには行きました。KPD（ドイツ共産党）のではありません。5月1日のメーデーのお祭りには、一緒に行進して、森に行きました。今もメーデーの行進には参加しています。労働組合のお祭りには行ったことはありませんでした。大晦日のお祭り *Silvester* にも行ったことはありません。カーニバルのお祭りは、昔は、仮装パーティと呼んでいましたが、これは、私も夫と一緒に好んで参加しました。しかも、私の両親もです。でも、復活祭 *Oster* や受難日 *Karfreitag* などは、まったく祝いませんでした。まったく質素なものでした。

でも聖霊降臨祭 *Pfingsten* だけは、祝っていたので、食べ物としては、おいしい肉のローストがあり、ちょっと気の利いた服も着ました。新しい靴も買ってもらいました。それが、誇らしかったものです。だから、その靴をはいて、散歩にでました。夏の季節の服装でした。髪には、新しいリボンを付けました。私には、服と靴とリボンのある、この聖霊降臨祭が、一番楽しい祝い事でした。何しろ、とても暖かくて気持ちの良い季節でしたし、新しい身につける物を買ってもらえました。少女時代で、一番楽しかったのは、やはり、何ととっても、この聖霊降臨祭です。私にとって、その他の歳の市などのお祭り騒ぎは、それほど楽しいものではありませんでした。

大人になってからのクリスマスの祝いもいつも、とても素敵でした。それ

に、私は、65歳まで働いていましたから、日曜日も、仕事がないので、楽しかったものです。

〈余暇〉

私の母は、いつも家にいて、いつも何かの家事をしていました。

父は、SPDの例会に行き、少しばかりビールを飲んで、それで満足して家に帰ってきたのです。ふだんは、家にいました。日曜日に外へ遊びに出かけるということもなかったのです。そんなことは、まだ流行していませんでした。私達の隣に、夫が鉄道に勤務している夫婦が住んでいました。それで、彼らは、ハルツ地方 *Harz* へ出かけたのですが、もう、それがセンセーショナルな出来事だったのです。「ピルグリム *Pilgrims* さんたちは、日曜毎にハルツ地方へ出かけるけれど、まあ、彼らは順調にいつて、金持ちだから、日曜毎にハルツ地方へいくのさ」などと言ったものです。でも、私たちは、そんなことはできませんでした。私たちは、日曜日は、家にいました。

学校の遠足には行きましたが、両親とは、ブラウンシュヴァイクでは遠足には行きませんでした。ザクセンに住んでいた頃は、両親と一緒に、家族で森へ遠足に行きました。深い森でした。坂になった通りを上って行くと、まもなく森に着きました。そこで、ハンモックを吊って、寝床をこしらえました。そういう時は、日曜日のとても朝早くに出かけたものです。ブラウンシュヴァイクに越してきてからは、両親は、この土地のことを良く知らないで、そういう遠足はしなくなりました。だから、私たちは、いつも家にばかりいたのです。両親は、パーティにも出かけました。友人ができて、その人たちの仮装パーティに行ったのです。私たちの生活は堅実で、とても質素でしたが、満足していました。

昔は、ここのブラウンシュヴァイクの市民公園は、それはそれは素晴らしいものでしたよ、本当に。今もまたとても素晴らしく整備されましたけれども、当時は、本当に、とても素敵でした。私の夫と私は、とてもじょうずに歌ったものです。コンサートや大きな集会やダンスにホーフイェーガー *Hof-*

jäger に行くときなどは、意識的に市民公園を通って行き、そこでベンチに腰掛けて、歌ったものです。二重唱でね。若者の歌や、美しい歌、それにハイキングのときに歌われる遍歴の歌、それに当時、アコーディオンの伴奏付きの「ピラ・ヘー」などの歌が、遠くからでも聞こえたものです。そうすると私たちも歌いました。私たちは、しょっちゅう遊びにも出かけたものです。当時、まだコンサート・ハウスが、そこにありました。ヴィルヘルムス・ガーデン *Wilhelmsgarten* やオペレッタ・ハウス *Operettenhaus* にも行きました。すべてが素晴らしかったのですよ。じょうずに歌うと、遠くからでも拍手を浴びたものです。本当に楽しかった。その他にも、穏やかで、とても暖かく、素晴らしい夜を外で過ごすこともありました。でも、今の若者のような、バカなまねはしませんでした。そんなバカなまねをしようという考えさえ浮かびませんでした。私が意味する、バカなまねというのは、性交渉をさしているのですが、私たちは、そんなことに考えが及ばず、どちらもとてもスポーツに力を入れていました。

私は水泳に力を入れ、昔はリュースシュタイク *Lünesteig* にあった BSV 水泳協会 *Schwimmverein BSV* に入っていました。私はとても若くして、この BSV の創設と運営の組織化に関わりました。これは BSV (ブラウンシュヴァイク・スポーツ協会) 中の水泳協会です。BSV の水泳愛好家の人々が、リュースシュタイクの土地を買いました。この人たちは良い考えを持った人々で、この計画を支援したのです。そして地面を掘ったのです。まず最初はただの穴にできた沼のようでした。その後、観覧席や大きな飛び込み台が作られたのです。私は、そこでとても素晴らしい青春時代を過ごしたのです。

私は、もう 8 歳の時から泳いでいました。というのは、ここに婦人用水浴場があったのですが、そこへ行っていました。12 歳か 13 歳の時には、もう私は BSV 水泳協会に入会していました。

ただし、この BSV 水泳協会は、1931 年か 32 年に脱会しました。といのも、これはブルジョワ的な協会で、右寄りでしたし、私の夫は左翼でしたから、

夫の希望で、私は脱会して、「デルフィン」"Delphin"に入会しなければならなかったのです。私が入会したのはとても若い時でした。私は、もちろん、夫に合わせなければならなかったのです。それで労働者の協会に入会したのです。それがデルフィン・プールでした。

私たちは、よく泳ぎに行きました。とてもよくスポーツをしたのです。夫はサッカーに、そして私が泳ぎに行くと、彼が帰りに私を迎えに来て、一緒に郊外の義父母のところまで自転車で訪ねて行ったものです。私たちは、牧草地を横切り、そこで飛び板を掛けてオーカー川 *die Oker* に入ったのです。こんなことは、今じゃあ禁止ですけど、当時は、まだこの川も汚染されていなくて、とてもきれいでしたからね。

その他には、夫と一緒に二人で演劇サークルにも入っていました。私たちの演劇サークルの名前は「フライエ・ビューネ」"Freie Bühne" でした。その当時、「ハンス・ザックス」"Hans Sachs"や「アイントラハト」"Eintracht" といった演劇サークルも、活動していました。私たちは、いろいろな素人劇を上演しました。いつもとても微笑ましかったものです。何歳の時に、この演劇サークルに入ったのかは、覚えていませんが、もう二人であちこち歩き回っていた頃のことですから、ひょっとしたら、結婚前の婚約していた時期かもしれません。

庭仕事に関しては、夫の両親が庭を持っていて、それを私たちが後に譲り受けましたが、夫は重い腎臓病だったので、庭仕事は全然出来ませんでした。私が一人で庭の世話をしなければなりません。

その他には何も公共の協会等には加入していませんでした。

夫は、昔、陸上競技をしていました。それとサッカー・クラブの「スポーツの友」"Sportfreunde"で、20年代には、積極的に活動していました。でも、1933年にナチがやってきて、このクラブは解散させられました。その後「アイントラハト」で長らく活動したのです。でも、いつ、これらのクラブに入って、いつやめたのかは、覚えていません。

ナチの時代には、労働者の協会はもうすべて禁止されてしまったのです。

夫は、ライクスバンナーでは、指導者でこそなかったのですが、マルチンスヘルナーに属して活動しました。33年のライクスバンナーの禁止まで活動していました。そのために、誰かに密告されて、ナチに引っ張って行かれたのです。

彼は、「フライエ・ビューネ」にも、解散させられた33年まで属していました。夫は、「フライエ・ビューネ」では、演出家のような役割をしていました。彼は、合唱クラブなどに、入ってはいませんでした。

夫の両親もとても歌の才能がありました。二人とも、合唱クラブに入っていたこともあります。いずれにしろ、私たちは、みんなとても仲良く暮らしました。

私の両親の親戚は、今の東独にいましたから、家に訪ねてくるのは、親戚の人々ではなくて、両親の友人や知人たちでした。つまり、近くに親戚はいなかったのです。彼らは、いつも夫婦単位で訪ねてきました。両親は、彼らとずいぶん長い年月、仲良く付き合っていました。どのような関係で知り合ったのかは知りませんが、両親の家に来たり、また両親が訪ねていたりしていた、2組の夫婦は、すぐ近くに住んでいた隣人でした。私には、彼らと大晦日を一緒に祝ったという記憶が、うっすらとあります。党の仲間かもしれません。両親は、居酒屋に酒を飲みになど行かず、夜は、いつも家にいました。

私は、結婚後に夫と一緒にビールを飲みに行ったことはあります。夕食後に、ここの、古い駅のレストランに行きました。駅の待合室は、気持ちよく坐っていました。

この待合室は、後方が汽車のホームに、前方がオーカー川に面した位置にあって、テーブルと椅子が置いてあり、ビールを飲んだり、簡単な夕食をとることもできましたし、それはもう素敵でしたよ。それは、14万人の人口だった頃の古いブラウンシュヴァイクの頃のことです。今の人口は、その2倍になっています。このフリードリッヒ・ウィルヘルム広場にあった古い駅のレストランは、今、銀行が建っている場所にありました。建物へ上がっていく

階段も建物の正面部分も、そのまま残っています。本当に、ここには素敵な思い出がたくさんあります。